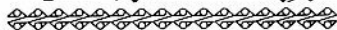


## 4 宗 教



ヤノママ族の生活全般にわたって、宗教的信念というものが作用しあっている。部落の中では朝早くから、夜遅くまで〈シャービリ〉と呼ばれる呪術師によって病気治療や予防の祈禱が行われる。病気は悪霊によってもたらされると考えられ、それを追い出すのがよい霊であると考えられている。また自然万物に精霊が宿っていると考えられている。

さらに部落はひとつのトーテムを持ち、各個人も〈リシ〉というそれぞれのトーテムを持っている。このトーテムは一般に動植物で、それぞれの守護霊になっている。またトーテム集団(部落)の成員は自分たちのトーテムを殺して食べることを禁じられている。出産、結婚、狩猟などについての宗教儀礼は他の項にゆずる。

ここではトーテムとかシャーマニズムというものを、ヤノママたちはどのように考え、行動しているのかを中心に書いていくことにする。ただし、以下のことはヤノママ族のもつ宗教体系のほんの一部であり、宗教が経済や法や政治と密接な関わりがあるということが重要なのである。

### <個人のトーテム>

ヤノママたちはだれでも自分の〈リシ〉(トーテム)を持っている。この場合鳥類が多いようであるが、その個人の〈リシ〉をもしだれかが殺せば、その〈リシ〉を持っている人は死ぬと考えられている。〈リシ〉とは各自が自分のために守護霊に選んだ動植物のことである。

▷アントニオの場合(シリアナ族ロベルト部落)

彼の〈リシ〉⇒特定の〈アラ〉(コンゴ  
ウインコ)

もしだれかが、彼の〈リシ〉である特別の〈アラ〉を殺した場合、アントニオは死ぬと他のヤノママらは言った。

▷ロベルトの場合(シリアナ族ロベルト部落  
首長)

彼が以前、急に胸が苦しくなった時、そばにいたところのカトワリ(ロベルト部落)がすぐに彼を抱くように背中から手をまわした。そして、そばにいた他の者もすぐに同様なことをした。この事についてはほかのヤノママたちはロベルトの〈リシ〉をだれかが撃ったからだといひ、ロベルトがよくなったのは、そばにいたものがこれに気付き、こういった動作をしたから回復したのだと信じている。

### <精霊たち>

つきに、前に述べた霊に関してもう少し述べよう。ヤノママたちにとって怖いものがたくさんあるという。その具体例が以下のことである。

病気がこわい 病気というものはヤノママの最も恐れるもののひとつである。だれかが病気になると、悪い霊をだれかにかけられたと思っている。また、これを追い出すのがよい霊である。

足あとがこわい 自分の足あとを大変恐れる。これは、敵(嫌いな人)の足あとを見つけた場合、葉につつんで、焼いたらその人は病気になると信じているからである。

▷コヨの場合(シリアナ族ロベルト部落)

コヨは最近、夫のいる女性と結婚したが、

このあと、彼は非常に高い熱を出した。これは妻の前の亭主がコヨにこの呪いをかけたためであると、ほかのヤノママたちはうわさをしていた。

▷ロベルトの場合(シリアナ族ロベルト部落)

我われの滞在中に、そこの部落の10名ほどが、数100kmはなれた部落で開かれた大きな祭りに行った。ここには多勢のインディオが数100kmはなれた地域より集まってきた。ロベルトはこの祭りに行く際に我われにこう言った。「私は向こうに着いたら自分のハンモックから動かない」。理由をたずねたところ、彼は「自分には多くの敵がいる、そのため動きすぎると、足あとの呪いを他の者にかけられるので恐ろしい。」と答えた。

□毒がこわい この毒も霊に関係するのである。例えば毒を实际飲まされなくとも「飲まされた」と思うだけで恐ろしいのである。

FUNAIは一時、デミニ河とトトビ河の合流点にポストをおいていたが、ホコテリヤシリアナのインディオが多数そこに行った時、FUNAIは彼らにコーヒーをもらった。ところが、彼らが部落に帰ってから病気になったものが出た。このときに彼らはみな、FUNAIに毒を飲まされたと思った。このため、FUNAIはポストを下流(現在の地点)に移さざるをえなくなった。これはミッションも何度も経験したことで、ホコテリの首長にコーヒーを飲ませたときも、彼は病気になり、長いあいだ、うらまれたそうである。

なお、狩猟の際の捕獲者が獲物を食べないというタブー、また名前につわる信仰については他の項にゆずる。(“食”、“人の一生”を参照)

＜シャーマン(呪術師)＞

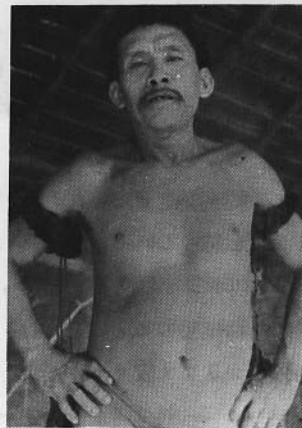
ここでのシャーマンのはたらきは、宗教儀礼を司ることと、祈禱での病気の治療という役割である。病気の治療には薬品は使用しない。シャーマンが使用する薬物は<ヤッコワナ>(クラーレ)と呼ばれる粉末のもので、これをシャーマン自身の鼻から吸うことにより、自己をエクスタシーに近づけようとするものである。しかし完全にエクスタシーの状態になるということはない。シャーマンが、病気全快の祈願あるいは予防のためにする口誦と踊りは<アシャプリム>と呼ばれるもので、これはどこの部落においてもよく見られるものである。

シャーマンは1人ではなく、部落の成員男子のかかなりの数がシャーマンであると考えられる。一般的にシャーマンになるには世襲とは関係なく、学習により資格をうるものと考えられる。

シリアナ族ロベルト部落のシャーマンはアントニオ、シビリアーノ、ベルナウド、ジョワンジョージ、カーロスである。

▷ロベルト部落でみられた病気治療

シャーマンがアントニオで病人がハイムンダであった。これは夜に行なわれ、ハイムンダがアントニオのところに来て、彼の



アントニオ(シリアナ族ロベルト部落の第一シャーマン)。上腕部につけた羽根飾りはシャーマンのしるしだ。

前に座った。最初アントニオは小さい声でブツブツといひ、次第にアントニオの声が大きくなっていった。ハイムンダはこの時、顔をうつむけた状態であった。アントニオの声は時々驚くほどの大きさになったり、また聞きとりにくいほど小さな声になったりした。単調な長い「語り」のような調子のもので、音程を上げ下げするものであった。この間、アントニオは<ヤッコワナ>を何度も鼻の穴から吸うのである。それによりアントニオの顔は紅潮していった。こうしているあいだにもアントニオは、ハイムンダの体の悪い部分をつかまえるようなしぐさで、頭から足の先までゆっくりと両手でさわり、そして突然、その病気の悪い霊と考えられるものを、横へ投げ捨てる所作をするのである。このとき、アントニオは手でおこなうばかりでなく、口でズーズーいわせて頭から足の先まで吸うようにして、また横へ吐き出すのである。この繰り返しが何度も続けられるのである。約2時間余り、この繰り返しの動作がおこなわれて、この日は終わった。

#### ▷同部落の昼間における病氣治療

シャーマンがアントニオで病人がレオナウドで、病人はおそらくマラリヤと考えられた。陽気な彼がこの病氣のため、顔は青ざめ、1日中ハンモックに寝ていた。アントニオはまず、ハンモックに横になっているレオナウドのそばで、ゆっくりと歩きまわり、そして踊り始めた。この踊りは両手を上下するもので比較的静かな踊りである。それから病人に近づいて、悪霊を取り除く所作をする。昼間は夜とちがって病人はじっとしているだけだがシャーマンの動作は非常に忙しく、大きな声で歌い踊りつつ行なう。昼間のこうした病人

に対する治療は、約3時間余りを要する。ここでも<ヤッコワナ>は使用された。

なお<アシャブリム>に関しては、連日行なわれていたが、1人で行なわれるとは限らず、ロベルト部落では、カーロスとベルナウドの2人でよく行なわれていた。これは動作も非常に激しく、かけ声も大きい。

最後に<ヤッコワナ>に関して述べておこう。シャーマンが儀礼に際して使用するのがこれつまりクラレレのことである。これは麻酔薬のかわりをするものと思われ、鼻から何度も吸うことによりエクスタシーの状態に近づく。クラレレを製造するには、まずクラレレの木を大ナタなどにより皮をはぎ、その内側のうすい粘膜をあつめ取ったものをきれいに並べて、火で乾かす。そして、それをカスターニャ(ブラジルナッツ)の殻のすり鉢ですりつぶす。それを<ジョッデヘ>(ザル)に入れてふるいかけると、微細な粉状のものだけが落ちるのである。ザルに残ったものは幾度もすりつぶし、これがきれいな粉末状になるまで行なう。なお、クラレレの木はジャングルにある野生のものを使用する。



粉末にしたクラレレは竹筒に入れて保存する。色は暗緑色である。